「日々の理科」（第 2876 号）　2022,-6,21

「１年生の花壇（５）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所 研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

１年生は、何か「自分だけの発見」をすると、「先生来て来て！」と、その「発見物」を見せようとする。行くのを渋っていると、手をつかまれて、半ば強制的に連れて行かれてしまう。この時の「発見物」は、雑草だった。花壇に生えた「植えた覚えのない草」が気になっていたようで、「これなぁに？」と聞くので、「オランダミミナグサっていう雑草だよ」と教えた。「雑草」の意味を知っていたようで、さっそく徹底的に「根絶やし」にしていた。

「先生、スズランが咲いてる！」というのもあった。スズランなんかあるわけないのだが、見ればピーマンの花だった。スズランを知っていることにも感心した。

どんな野菜にも花が咲くのだが、１年生は花が成長して結実することを知らない者もいる。「これが、もうすぐピーマンになるんだよ」と教えると、「えーー！」と、かなり驚いていた。

実際に１週間後には、小さなピーマンに成長していた。３年生なら、一つの植物や、一つの花を継続観察させることもできるが、１年生では、断片的な観察になることが多い。

こちらは、センナリヒョウタン（千成瓢箪）。食べることはできないが、うまく育てると、小さなヒョウタンがたくさん実のるので面白い。もちろん、千個はならない。

ひょうたんの仲間も、最初はなかなか雌花がつかない。しかし雌花の子房は、最初からヒョウタンの形をしているので、１年生はきっと興味を持つだろう。